様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月　９ 日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ１３２１０

研究課題名（和文）現代語との対照による古代語引用節の記述的研究

研究課題名（英文）A descriptive study of quotative clause in Earlier Japanese through comparison with Modern Japanese

研究代表者
辻本　桜介（TSUJIMOTO, Osuke）

関西学院大学・文学部・助教

研究者番号：９０７８０９９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、古代日本語における引用句「…と」が現代語と比較してどのように異なった振る舞いをするかを可能な限り記述した。具体的には、補助活用の「あり」と結びついて“発言しているような様子”を表せること、引用句の言葉を発する主体と後続節の主体とが異なる構造を臨時的に作れること、種々の係助詞と結びついて終助詞的用法を発達させていることなどが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
引用句「…と」と述語からなる構造（引用構文）についての文法論的な研究は、藤田保幸『国語引用構文』（2000年、和泉書院）という大著が出て以来、大きな進展は見込めないとみなされてきたようである。しかし本研究課題の成果によって、古代語における「…と」が現代語とかなり異なった性質を持つことが証明された。今後、中世以降の通時的な研究の展開が俟たれる状況を作り出したことになる。

研究成果の概要（英文）：In this research, I described several functions of quotative particle "to" in Earlier Japanese. The result is as follows; (1) "To" can cooccur with existential verb "ari" and express that someone seems to be saying something. (2) "To" can form a construction in which the cited words are not attributed to the agent of main clause. (3) "To" can function as a sentence-final particle when cooccurring with binding particles.

研究分野：日本語学

キーワード：引用句　引用構文　古代語　複合辞　補文　「名づく」　「見る」　「といふ」

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)　ほととぎすの、あまたさへあるにやと、鳴きひびかすは、（枕草子）
(2)??ほととぎすが、「さらに沢山いるのだろうか」と、鳴いているのは、

この例は引用された語句の発言者と述語の主体が一致しない構造となっており、現代語では不自然である。古代語の「…と」は、「…と言ふ」のような現代語と同様の用法のほかに、こうした現代語には無い用法を持つが、従来の研究では全く扱われていない。古代語の引用節「…と」は、現代語の「…と」とどのように文法的性格が異なるのだろうか。この点が問われる。

２．研究の目的

本研究の目的は、次の【１】～【３】によって古代語の引用節「…と」の文法的性格を解明することである。
【１】「…と」が現代語に無い文構造で使われる４種の用法の意味・機能を明らかにする
【２】「…と」を形状性用言が受ける構造の意味・機能を明らかにする
【３】「…と」と「…とて」の使い方が類似する場合に着目し、その相違を明らかにする

３．研究の方法

国立国語研究所『ＣＨＪ』、国文学研究資料館『大系本文データベース』『二十一代集データベース』等で引用節「…と」「…とて」の全数調査を行う。得られた用例の中で、(1)のような構造のもの、間接疑問文のように解されるものなど、現代語に無い構造のものを探し、どのような用法かを記述する。形状性用言を述語とする用例については、現代語における同様の例と比較しながら考察する。

４．研究成果

本研究の成果は、下記（１）～（１１）に示す単著論文 10 本・研究ノート１本として結実した。

（１）先行研究における現代語の引用構文の分類方法について検討した。まず、藤田保幸(2000)『国語引用構文の研究』は、現代語の引用構文を、第Ⅰ類＝引用句の示す発言・思考と後続する述部の示す発言・思考とが事実上一致するタイプと、第Ⅱ類＝引用句の示す発言・思考と後続する述部の示す事柄が事実上同一場面で共存するタイプとに分類している。一方で、第Ⅱ類の引用構文を、引用句の直後に「言って」「思って」等の述部が伏在するものだとする文献も複数見られた。もしそのような述部が伏在しているのなら、第Ⅱ類は第Ⅰ類と同じ構造を持つということになる。しかし、どの説を見てもそうした述部の伏在を裏付ける根拠は何も示されておらず、むしろ、「言って」「思って」等の述部の伏在を想定すると説明が困難となる現象が複数存在する（引用句が発言を示すのか思考を示すのか曖昧な場合があることや、「言って」や「思って」を補うと元の意味から少し変容してしまうことなど）ことがはっきりした。引用構文において「言って」「思って」等の述部が伏在化するというような現象は想定できない。これは、古代語の引用節の分析においても参考になる事実と考えられる。（『米子工業高等専門学校研究報告』55 所収論文）
（２）引用節「…と」と動詞「いふ」からなる中古語の複合辞「といふ」が持つ諸用法を現代語と比較しながら記述し、和文においては、被修飾名詞の表す思考内容を引用する用法が未発達であったこと、漢文訓読文では間接疑問節に相当する働きを持つ用例が少なからず得られることなどを明らかにした。（『日本語文法史研究』５所収論文）
（３）中古語の視覚動詞「見る」が引用節「…と」と共起する場合、瞬間的な視認内容を引用し、一定期間継続する視覚動作による視認内容を引用するわけでないことを、準体言を承ける「…を見る」と比較しながら主張した。（『日本文芸研究』72-2 所収論文）
（４）（２）と関連して、複合辞化について考察するために中古語の複合辞「により（て）」の用例を観察していたところ、それとほぼ同義に見える「ゆゑ（に）」とは異なる性質を持つことが明らかになった。（『ことばとくらし』32 所収論文）
（５）引用節「…と」に引かれる言葉を発した主体と、後続する述部の主体とが異なる構文の用例も収集を概ね終え、どのような構造・用法であるかを論文化した（『中部日本・日本語学研究論集』所収論文）。
（６）「…とあり」はテ形を取らないこと等から見て補助動詞の「あり」と共起した形と考えられ、誰かが発言をしているような様子を描写する用法から、書記内容を引用する用法等が派生している。（『日本文芸研究』73-1 所収論文）
（７）「…と」と共起しやすい動詞である「問ふ」の訓点語での用例は、質問相手を表す格成分として「…を」と「…に」の両方が現れるが、「…を」の場合は質問相手自体についての問いの内容が引用内容として現れやすい。（『ことばとくらし』33 所収論文）
（８）従来、名づけという瞬間的行為を描写すると考えられてきた「…と名づく」は、実のとこ

ろは、予め付与された名前が習慣的に用いられている状況を意味する形であり、それゆえに遂行文での使用が無い、あるいは普通名詞や文相当句が引用語句として現れるなどといった現象が観察される。(『人文論究』71-3 所収論文)
（９）文末に現れる場合、しばしば後接する「なむ」「ぞ」等の係助詞の種類ごとに終助詞的用法を発達させており、地の文・会話文・消息文・和歌といった文体ごとに使用の実態が異なっている。(『日本文芸研究』73-2 所収論文)
（１０）中古語の引用句「…と」は、「知る」等の叙実動詞の補文となる場合に間接疑問文に相当する用法が散見される（『日本語の研究』18-1 所収研究ノート）
（１１）形容詞等の状態性述語と共起する場合は、藤田保幸(2000)『国語引用構文の研究』でいう「第Ⅰ類」の構造に限定され、述語が情意形容詞となる場合はどのような文脈でも情意主体自身の台詞のように解される。(『文学・語学』234 所収論文)

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 辻本桜介	４．巻 73-1
２．論文標題 中古語における引用表現「…とあり」について	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本文芸研究	６．最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 辻本桜介	４．巻 33
２．論文標題 訓点語の「…を問ふ」と「…に問ふ」について―格助詞ヲ・ニの相違―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 ことばとくらし	６．最初と最後の頁 34-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 辻本桜介	４．巻 71-3
２．論文標題 古代語における引用表現「…と名づく」について	５．発行年 2021年
３．雑誌名 人文論究	６．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 辻本桜介	４．巻 （なし）
２．論文標題 中古語における引用句「…と」の特殊用法	５．発行年 2022年
３．雑誌名 中部日本・日本語学研究論集	６．最初と最後の頁 3-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 辻本桜介	4．巻 73-2
2．論文標題 中古語における引用句の文末用法―終助詞的用法をめぐって―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 日本文芸研究	6．最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 辻本桜介	4．巻 234
2．論文標題 中古語の状態性述語を持つ引用構文について	5．発行年 2022年
3．雑誌名 文学・語学	6．最初と最後の頁 37-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 辻本桜介	4．巻 18-1
2．論文標題 《研究ノート》中古語における間接疑問文相当の引用句	5．発行年 2022年
3．雑誌名 日本語の研究	6．最初と最後の頁 70-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 辻本桜介	4．巻 32
2．論文標題 原因・理由を表す中古語の二形式―ニヨリテとユエニの比較―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 ことばとくらし	6．最初と最後の頁 30-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 辻本桜介	4．巻 5
2．論文標題 中古語における連体助詞的な複合辞「といふ」の諸用法	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本語文法史研究	6．最初と最後の頁 123-147
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 辻本桜介	4．巻 72-2
2．論文標題 中古語における視覚動詞「見る」の補文	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本文芸研究	6．最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 辻本桜介	4．巻 55
2．論文標題 引用構文における「言って」「思って」の伏在という幻想 ―大島(2017)、Shimamura(2018)等に対する批判的検討―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 米子工業高等専門学校研究報告	6．最初と最後の頁 5-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 辻本桜介
2．発表標題 中古語における引用表現「…と名づく」について ―平安初期訓点資料の用例調査による―
3．学会等名 国語語彙史研究会（第124回）
4．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関